

## 独立的一相互依存的自己解釈図式の対人状況普遍性の検討

松田大治・黒川正流・坂田桐子

広島大学総合科学部人間行動研究講座

### Does one's dominant concept of self depend on differences in the interpersonal situation?

Daiji MATSUDA, Masaru KUROKAWA, and Kiriko SAKATA

*Department of Behavioral Sciences, Faculty of Integrated Arts and Sciences,  
Hiroshima University, Higashi-Hiroshima 724 Japan*

**Abstract** : The Japanese are said to exhibit fundamental differences in their interpersonal attitudes and interpersonal behaviour, according to whether they are interacting as members of an 'in-group', or whether they are interacting with members of an 'out-group'.

Markus and Kitayama (1991) advocate the concept of self based on independence, and the concept of self based on interdependence, as conceptual tools with which to account for cultural differences and individual differences in social behavior.

The object of this study is to examine how the dominant concept of the self among the Japanese differs with respect to situations involving 'in-groups' and 'out-groups'.

In Study 1, we have integrated and refined various existing scales of measurement which determine the type of dominant concept of self (Kitayama et al., 1991; Morikawa, 1992; Takata, 1992), and have devised a scale for analysing the dominant concept of self, according as it operates in situations involving 'in-groups' and in situations involving 'out-groups'.

In Study 2, we set up as a hypothesis an interpersonal conflict situation relating respectively to 'in-groups' and 'out-groups' and investigate the efficacy of the dominant concept of self which influences the evaluation of strategies for coping with the conflict. Generally speaking, in 'in-group' situations, an attitude of compromise is favoured, while in 'out-group' situations, an attitude of 'doing one's own thing'. This tendency was strikingly shown in the category of the concept of self based on interdependence. In addition, we examined the kind of differences that can be found in the concept of self among the Japanese as this affects 'in-group' situations and 'out-group' situations. While the difference of situation did not have influence on the concept of self based on independence, the concept of self based on interdependence showed a striking dominance in situations involving 'in-group', compared with situations involving 'out-groups'.

## 問 題

近年、社会心理学領域では「自己」の観点から社会的行動の文化差を検討する試みがなされている。Markus & Kitayama (1991) は、西洋文化圏と東洋文化圏における感情、認知、行動の差異を説明する概念として独立的一相互依存的自己解釈図式 (independent-interdependent construal of self) という概念用具を提唱している。彼らによると、自己解釈図式とは自己と他者に関する知識が組織化されたものであり、情報処理過程、ひいては思考、感情、動機づけなどに大きな影響を与えるものである。この自己解釈図式は東洋文化圏の人々に典型的な相互依存的自己解釈図式 (interdependent construal of self) と西洋文化圏の人々に典型的な独立的自己解釈図式 (independent construal of self) の2つに分類される。相互依存的自己解釈図式を持つ者は、人を社会的文脈に関連づけ、相互に連続した存在として認識するのに対し、独立的自己解釈図式を持つ者は、人を社会的文脈から切り離された相互に独立的な存在として認識する。相互依存的自己解釈図式の視座では、ある特定の他者との関係における自己の側面が重要であり、独立的自己解釈図式の視座では社会的文脈から独立した自己の側面が重要である。なお、Markus らは、同一文化圏内にも個人差として、独立的自己解釈図式が優勢な者と相互依存的自己解釈図式が優勢な者の両方が存在することを明らかにしている。

この自己解釈図式の測定用具として、Markus & Kitayama (1991) は、「義理がたいこと」「人情にあついこと」などの重要性と自分へのあてはまりの程度を回答させる尺度を、主としてアメリカ人学生を対象に作成した。しかし、これまで数多くの日本人論で指摘されてきたように (土居, 1971; 井上, 1977; 我妻, 1982)、日本人の対人意識や態度は内集団 (ウチ) と外集団 (ソト) で極度に異なる可能性がある。例えば、井上 (1977) によると、欧米のような個人主義社会では自分と他者とは本質的に異なるという発想がその基本をなしているため、他者は常に自分に対立する存在であると同時に協調の可能性をも含んだ存在とみなすのに対し、日本のような集団主義社会では、一般的他者という意識が薄く「敵」か「味方」かという区別しか存在しない。我妻 (1982) もこのような考えから、日本では小集団の成員相互のコミュニケーションは円滑だが、集団間のコミュニケーションは非常に困難になりがちであるとしている。さらに土居 (1971) は「甘え」理論という観点からウチとソトについて論じている。それによると、ウチとソトを区別する目安は甘えに基づく「遠慮」の有無であり、人間関係は遠慮がない親子の間柄 (人情の世界)、その外側に遠慮が働く人間関係 (義理の世界)、その外側に遠慮を働かせる必要のない他人の世界 (無縁の世界) の3つの同心円として考えられ、人情と義理の世界をウチ、無縁の世界をソトとみなす。これらの指摘から、日本人の自己解釈図式は内集団場面と外集団場面で異なることが考えられる。日本人の独立的一相互依存的自己解釈図式は安定的な類型として存在するというよりも、むしろ自分が置かれている場面や状況によって変動し得る、状況随伴的なものである可能性がある。

本研究は、Markus & Kitayama (1991) の提唱した独立的一相互依存的自己解釈図式に基づいて、新たに状況随伴的的自己解釈図式の可能性を検討するものである。

研究1では、従来の自己解釈図式尺度を参考にして、内集団接触および外集団接触という場面設定のある自己解釈図式測定尺度を作成する。ここでは土居 (1971) に基づいて、内集団を「義理の世界」、外集団を「無縁の世界」と定義する。さらに研究2では、作成した自己解釈図式尺度の妥当性を検討するとともに、自己解釈図式の場面変動を吟味する。妥当性の検討として、内集団もしくは外集団に属する人物との利害葛藤場面を設定し、4種の異なる葛藤解消行動のそれぞれに対する満足度と採択可能性が当該場面で顕現する自己解釈図式によって異なるかどうかを吟味した。

## 研究1

### 方 法

**調査対象：**社会心理学を受講している広島大学の学生185名（男性121、女性64）、平均年齢18.9歳（SD=0.9）を調査対象とした。

**質問紙構成：**「自分の仲間や親しい友人と接するとき」（以下、内場面とする）と、「見ず知らずの人と接するときや周りにそういった人達しかいないとき」（以下、外場面とする）の2種類の場面を想定させ、それぞれについて以下の尺度に回答させた。1) Markus & Kitayama (1991) の自己解釈図式尺度：「義理がたいこと」「人情にあついこと」など8項目について、自分にとっての重要性（人生観）と自分へのあてはまり（自己観）を評定させる計16項目。2) Markus & Kitayama (1991) を参考に盛川 (1991) が作成した自己解釈図式尺度12項目。3) 高田 (1992) の独立一相互依存的自己尺度から設定した状況に適さないと思われる項目を除外した10項目。4) 回答の際に想定した人物や状況のイメージに関するSD尺度10項目。以上はいずれも7件法で回答させた。なお、3種の自己解釈図式尺度については、全項目の文言を設定場面に対応するよう修正して使用した。例えば、「あなたは主体性のある方ですか」という項目は、内場面用には「あなたは、仲間と一緒に行動するとき主体性のある方ですか」、外場面用には「あなたは、見知らぬ人たちの中で行動するとき主体性のある方ですか」と修正した。

**実施方法：**同一回答者群に対して4週間の間隔を置いて計2回実施した（以下、前者をPREデータ、後者をPOSTデータとする）。2回とも講義時間の開始時および終了時に内場面と外場面についてそれぞれ別々に実施し、最終的に1人の調査対象者が両方の場面について回答した。講義の開始時と終了時のどちらにどちらの場面について回答するかはランダムに割り当てた。

### 結 果

#### 1. 場面設定の操作チェック

回答の際に想定した人物や状況のイメージ評定について、場面間で対応のあるt検定を行った結果、PRE、POST両データにおいて全項目で有意差が認められた。全体的に、内場面、すなわち仲間や親しい友人と接する状況は、外場面、すなわち見ず知らずの人と接する状況より「親しみやすい」「感じのよい」「明るい」「暖かい」などポジティブなイメージとして評定されていた。従って場面設定操作の妥当性が認められたといえる。

#### 2. 項目の選定

PREデータおよびPOSTデータについてそれぞれ主因子法による因子分析を行った。3種の自己解釈図式尺度の各項目得点について場面間のt検定を行ったところ、すべての項目で有意差が認められたため、内場面についてのみ因子分析を行い、最終的に抽出された項目に外場面の項目を対応させるという方法によって項目を選定した。なお、Markus & Kitayamaの尺度は各項目について自己観と人生観の得点を加算した数値を用いた。

communality が0.4以下の項目を削除して因子分析を繰り返したところ、最終的にPREデータ、POSTデータともに類似の4因子が抽出された。第1～第4因子はそれぞれ「他者への順応性」「独断性」「自己信頼」「評価懸念」の因子と解釈される。これらの因子の固有値および寄与率は以下の

通りである。PRE データ (固有値: 3.57, 3.07, 2.02, 1.97; 寄与率: 24.2%, 15.8%, 10.9%, 8.1%)、POST データ (固有値: 4.02, 3.37, 2.39, 2.10; 寄与率: 26.1%, 17.4%, 8.5%, 7.5%)。これらの結果から、PREデータとPOSTデータで同一因子に属しており、かつ因子負荷量の高い24項目を最終的な尺度項目として採用した (以下Situational Self Scale: SS 尺度とする)。第1および第4因子の計12項目を相互依存性項目、第2および第3因子の計12項目を独立性項目とした。SS 尺度項目をTable 1 a, 1 b に示す。

### 3. 再テスト法によるSS尺度の信頼性の検討

SS 尺度の各項目得点、因子得点、独立性得点、および相互依存性得点について場面ごとに PRE-POST 間の積率相関係数を算出したところ、すべてに 1% 水準の有意な正の相関が認められ (Table 1 a, 1 b)、SS 尺度の信頼性が確認された。

Table 1 a. 最終的に選定された内場面尺度項目と test-retest の相関係数

質問項目 (内場面)	r
(他者への順応性因子)	0.78**
・あなたは、仲間への人情に厚いほうですか	0.67**
・あなたは、仲間から受けた恩を忘れないほうですか	0.65**
・あなたは、仲間に対して思いやりのあるほうですか	0.59**
・あなたは、仲間から受けた恩は必ず返すほうですか	0.63**
・仲間から好かれることは自分にとって大切なことである	0.57**
・自分のしたことで自分の仲間が悪く思われるのは耐えられない	0.39**
(独断性因子)	0.70**
・あなたは、仲間と一緒に行動するとき主体性のあるほうですか	0.59**
・あなたは、仲間と一緒に行動するとき自分の意見を持っているほうですか	0.60**
・あなたは、仲間と一緒に行動するとき独立心の強いほうですか	0.56**
・あなたは、たとえ仲間が反対しても自分の主張を貫き通すほうですか	0.53**
・仲間に対して自分の意見をはっきり言う	0.52**
(自己信頼因子)	0.73**
・自分のことは、仲間の手を借りることなく自分で解決すべきである	0.52**
・仲間に頼るのは好きでない	0.58**
・親しい友人や仲間がいても最後に頼りになるのは自分である	0.57**
(評価懸念因子)	0.59**
・仲間が自分をどう思っているかを気にする	0.53**
・自分と仲間たちとの間に成立する地位の差や相対関係が気になる	0.55**
相互依存性因子 (他者への順応性因子+評価懸念因子)	0.75**
独立性因子 (独断性因子+自己信頼因子)	0.75**

(\*\*p<.01)

Table 1 b. 最終的に選定された外場面尺度項目と test-retest の相関係数

質問項目 (外場面)	r
(他者への順応性因子)	0.73**
・あなたは、自分と関係のない他人への人情に厚いほうですか	0.58**
・あなたは、見ず知らずの人から受けた恩を忘れないほうですか	0.58**
・あなたは、見ず知らずの人に対して思いやりのあるほうですか	0.65**
・あなたは、見ず知らずの人から受けた恩は必ず返すほうですか	0.63**
・自分と関係のない人でもその人から好かれることは自分にとって大切なことである	0.56**
・自分のしたことで自分と関係のない人が悪く思われるのは耐えられない	0.48**
(独断性因子)	0.74**
・あなたは、見知らぬ人たちの中で行動するとき主体性のあるほうですか	0.62**
・あなたは、見知らぬ人たちの中で行動するとき自分自身の意見を持っているほうですか	0.63**
・あなたは、見知らぬ人たちの中で行動するとき独立心の強いほうですか	0.58**
・あなたは、たとえ自分と関係のない他人が反対しているように感じて自分の主張を貫き通すほうですか	0.59**
・見ず知らずの人にも自分の意見をはっきり言う	0.56**
(自己信頼因子)	0.56**
・自分のことは、見ず知らずの人に頼らないで自分で解決すべきである	0.41**
・見ず知らずの人に頼るのは好きでない	0.51**
・周りに見知らぬ人しかいないとき最後に頼りになるのは自分である	0.45**
(評価懸念因子)	0.58**
・他人が自分をどう思っているかを気にする	0.63**
・たとえ自分と関係のない他人でもその人と自分との地位の差や相対関係が気になる	0.43**
相互依存性因子 (他者への順応性因子+評価懸念因子)	0.73**
独立性因子 (独断性因子+自己信頼因子)	0.73**

(\*\*p<.01)

## 研究 2

## 問 題

研究 2 では、研究 1 で作成した SS 尺度の妥当性を吟味し、SS 尺度によって測定される自己解釈図式の場面による変動を検討する。妥当性検討のために、内集団および外集団に属する人物との 2 種の利害葛藤場面を設定し、それぞれの場面で採択可能な 4 種の葛藤解消行動についての満足度を外的基準として比較する。葛藤解消行動の設定と満足度の測定には Thibaut & Kelley (1959) の成果マトリクスの考え方を援用する。

Thibaut & Kelley (1959) は、成果 (outcome) という面から親密な 2 者関係を表現する手段として成果マトリクスを用いた。これはゲーム理論で利得行列といわれる概念用具を用いて、相互関係から得られる満足感としての利得と、不満や悲しみとしてのコストという 2 つの要素で評価される成果を測定するものである。盛川 (1992) は、この成果マトリクスで測定される恋人関係の相互依存性と自己解釈図式の関係について検討している。

その結果、相互依存的自己解釈図式を持つ者の恋人関係は関係外部の他者状況 (両親や友人) に強く影響されるが、独立的自己解釈図式を持つ者の場合は関係外部の他者状況の影響を受けにくいことが示唆された。相互依存的自己解釈図式を持つ者はさまざまな人間関係に照らして自己を定義するため、プライベートで排他的な性質を持つはずの恋人関係でさえも関係外部の他者 (例えば両親) の影響を強く受けるのである。本研究では、この知見に基づいて、自分と恋人の選好に関係外部の他者の要因を加えた成果マトリクスを使用する。関係外部の他者要因には、内集団との葛藤が存在する内集団葛藤条件 (以下、内葛藤条件) と外集団との葛藤が存在する外集団葛藤条件 (以下、外葛藤条件) の 2 条件を設定する。

ここで用いる成果マトリクスは Fig. 1 に示すものである。行動 1 は「関係外部の他者との葛藤が生じて自分と恋人の選好を優先する行動」であり、自分か恋人のいずれかもしくは両方が関係外部の他者の選好を優先する行動 2、3、4 は「関係外部の他者との葛藤を回避する行動」である。葛藤回避の程度は 2 人とも関係外部の他者の選好を優先する行動 4 がもっとも強い。従って、行動 1 の満足度を高く想定することは、関係外部の他者の利害や思惑にとらわれない独立志向を示すものとする。また、行動 2、3、4 の満足度を相対的に高く想定することは、関係外部の他者との協調を自己の満足の前提とする相互依存志向を示すものとする。

## 仮 説

内場面での自己解釈図式の類型は内葛藤条件における行動満足度に反映され、外場面での自己解

		自 分	
		自分の選好に従う	関係外部の他者の選好に従う
恋 人	本人の選好に従う	行動 1	行動 3
	関係外部の他者の選好に従う	行動 2	行動 4

Fig. 1 研究 2 で使用した成果マトリクス

釈図式の類型は外葛藤条件における行動満足度に反映されるであろう。従って、①内葛藤条件の行動1に対する満足度は、内場面で独立的自己解釈図式を持つ者の方が相互依存的自己解釈図式を持つ者より高く、行動2、3、4についてはその逆である。ただし、外葛藤条件の行動満足度については内場面の自己解釈図式の効果は生じない。②外葛藤条件の行動1については、外場面で独立的自己解釈図式を持つ者の方が相互依存的自己解釈図式を持つ者より満足度が高く、行動2、3、4についてはその逆である。ただし、内葛藤条件の行動満足度については外場面の自己解釈図式の効果は生じない。③内場面と外場面で自己解釈図式のタイプが一貫している者、すなわち状況普遍的自己解釈図式を持つ者は、どのような状況でも行動傾向が一貫しているため、行動満足度には条件（内葛藤と外葛藤）間の差異が認められない。

## 方 法

**調査対象：**社会心理学を受講している広島大学の学生212名（男性139、女性73）、平均年齢19.0歳（SD=0.91）。

**場面設定：**内葛藤条件と外葛藤条件の2種類のシナリオを設定した。内葛藤条件はつぎの通りである。「あなたと恋人は①同じサークルに所属しており、どちらも以前からAという映画をとて見たいと思っていました。今日はその映画の上映の最終日です。しかし先日あなた方が受講している講義で、②心理学科に在籍しているそのサークルの先輩が実験の協力者を募集したので二人とも実験に協力することにしていました。今日はその実験が行われる日でもあります。実験はごく簡単な内容のもので、参加すれば学期末のテストの得点に参加点が加えられることになっています。また、たとえ参加しなくても、そのことで成績が悪くなったり、先生に目をつけられるというようなことはありません。実験を休めば③その先輩に迷惑をかけたか悪く思われたりするかもしれませんが、参加点を得なくてもこの講義の成績には二人とも自信があります。二人が映画に行く場面と、約束通り先輩の実験に参加する場面を想像してください。外葛藤条件では下線部①を削除し、下線部②を「ある他学部の学生」に、下線部③を「実験者」にそれぞれ変えて提示した。

**満足度評定：**上記2種のシナリオについて、自分と恋人の行動の組み合わせによる4つの行動（Fig. 1）、すなわち、自分たちの都合を優先し2人で映画を見に行く行動（行動1）、自分は映画、恋人は実験に協力する行動（行動2）、自分は実験に協力し、恋人は映画を見に行く行動（行動3）、外部者との約束を優先し2人とも実験に協力する行動（行動4）を提示し、それぞれの行動をとった場合の自分の満足度を21ポイント・スケール（+10点「非常に満足」から-10点「非常に不満」）で評定させた。また、4種類の行動の中から実際にどの行動を採択するかを予測回答させた。

**実施方法：**講義の開始時に内場面SS尺度か外場面SS尺度のいずれか一方に回答させ、終了時に他方のSS尺度と満足度測定尺度に回答させた。内葛藤条件と外葛藤条件、および内場面SS尺度と外場面SS尺度の実施順序は被験者間でランダムにした。

## 結 果

### 1. 内場面および外場面の自己解釈図式と各行動の満足度の分析

内場面および外場面SS尺度の各因子得点、独立性得点、および相互依存性得点の平均値をTable 2に示す。仮説1を検討するため、内場面での相互依存性得点から独立性得点を引いた差得点の上位30%を内場面での相互依存群、下位30%を内場面での独立群とし、各行動の満足度を従属

変数として条件（内葛藤／外葛藤）×内場面での自己解釈図式（独立群／相互依存群）の2要因分散分析（1 between, 1 within）を行った（Table 3 a）。その結果、行動1、行動3、および行動4で条件の主効果が認められた〔行動1：F(1,134) = 28.33,  $p < .01$ 、行動3：F(1,133) = 12.57,  $p < .01$ 、行動4：F(1,134) = 10.18,  $p < .01$ 〕。行動1については内葛藤 < 外葛藤、行動3および4については内葛藤 > 外葛藤であった。つまり、内集団との利害葛藤より外集団との葛藤の方が満足し（行動1）、外集団との協調より内集団との協調の方が満足度が高い（行動3、4）。これは、自己解釈図式に関わらず、基本的に内集団との葛藤回避行動の満足度が高いことを示すものである。行動2では群の主効果が認められ〔F(1,133) = 5.45,  $p < .05$ 〕、独立群より相互依存群の方が満足度が低いことが明らかになった。この結果は、関係外部の他者状況に関わらず、恋人との2者関係のあり方が自己解釈図式によって異なることを示していると考えられる。すなわち、恋人が恋人自身の選好に合わない行動をとっているのに自分は自分の選好に合う行動をとるという状況で相対的に独立群の満足度が高いことは、独立的自己解釈図式の視座と一致する結果である。行動4では交互作用傾向が認められた〔F(1,133) = 2.86,  $p < .1$ 〕。外葛藤条件の群間に有意差があり（独

Table. 2 各場面における尺度得点の平均値 (SD)

	内場面	外場面
1. 他者への順応性	54.6 (7.55)	47.7 (8.14)
2. 独断性	41.4 (7.81)	39.9 (8.16)
3. 自己信頼	12.8 (3.45)	16.2 (2.97)
4. 評価懸念	9.0 (2.41)	8.8 (2.70)
独立性得点	54.1 (9.29)	56.1 (9.36)
相互依存性得点	63.6 (8.25)	56.6 (9.46)

Table. 3 a. 各行動の満足度における2(条件)×2(内場面の自己解釈図式)の分散分析結果

	mean (SD)				F value : all dfs=(1, 133)		
	内集団葛藤条件		外集団葛藤条件		主効果		交互作用
	独立群 (n=69)	相互依存群 (n=66)	独立群 (n=69)	相互依存群 (n=66)	群	条件	群×条件
行動1	1.99 (6.49)	1.87 (5.80)	4.20 (6.46)	4.39 (5.99)	0.00	28.33**	0.12
行動2	-6.12 (5.21)	-7.61 (3.70)	-6.38 (5.26)	-8.06 (2.92)	5.45*	1.12	0.08
行動3	-5.12 (5.29)	-6.27 (4.77)	-6.57 (4.57)	-7.30 (3.86)	1.72	12.57**	0.36
行動4	4.45 (4.81)	5.15 (4.55)	2.51 (5.56)	4.55 (4.22)	3.60*	10.18**	2.86*

注：()内はSD、\*\* $p < .01$  \* $p < .05$  + $p < .10$ 

Table. 3 b. 各行動の満足度における2(条件)×2(外場面の自己解釈図式)の分散分析結果

	mean (SD)				F value : all dfs=(1, 133)		
	内集団葛藤条件		外集団葛藤条件		主効果		交互作用
	独立群 (n=64)	相互依存群 (n=71)	独立群 (n=64)	相互依存群 (n=71)	群	条件	群×条件
行動1	2.03 (6.62)	1.74 (5.91)	5.02 (6.03)	3.54 (6.29)	0.83	28.89**	1.75
行動2	-6.23 (5.33)	-7.45 (3.78)	-7.42 (4.35)	-7.63 (3.99)	1.09	4.57*	2.45
行動3	-5.64 (5.24)	-6.12 (4.86)	-7.00 (4.40)	-6.83 (4.31)	0.05	9.60**	0.97
行動4	4.88 (4.72)	5.07 (4.40)	2.91 (5.19)	4.38 (4.47)	1.37	12.37**	2.83*

注：()内はSD、\*\* $p < .01$  \* $p < .05$  + $p < .10$



立群<相互依存群)、独立群の条件間にも有意差があった(内葛藤>外葛藤)。内葛藤条件において群間の満足度に有意差がないのに外葛藤条件の群間に有意差が認められたことは、仮説1を支持しない結果である。

つぎに、仮説2の検討のために外場面の自己解釈図式について同様の分析を行ったところ(Table 3b)、すべての行動に条件の主効果が認められた[行動1:F(1,134)=28.89, p<.01、行動2:F(1,133)=4.57, p<.05、行動3:F(1,133)=9.60, p<.01、行動4:F(1,134)=12.37, p<.01]。行動1については内葛藤<外葛藤、行動2、3、4については内葛藤>外葛藤であった。これは内場面の自己解釈図式の分析結果と同じである。さらに、行動4については交互作用傾向が認められた[F(1,134)=2.83, p<.1]。外葛藤条件の群間に傾向差があり(独立群<相互依存群)、独立群の条件間に有意差があった(内葛藤>外葛藤)。これは仮説2を概ね支持する傾向である。

以上の結果から、少なくとも外場面SS尺度には妥当性があると考えられる。内場面の自己解釈図式に仮説と異なる結果が得られたことについてはつぎの解釈が可能である。すなわち、自己解釈図式に関わらず内集団との葛藤を回避する行動の満足度が高かったことから、SS尺度作成時に想定した内集団状況に比べ、ここで設定した内集団状況のインパクトが非常に強かったことが考えられる。ここで設定した他者状況には、「サークル」というウチの世界とはいえ「先輩」という地位の要素が含まれており、SS尺度作成時に想定させた「親しい友人や仲間」より土居(1971)が定義するところの「遠慮」が強く働く状況であった可能性がある。従って、ここでの結果は内場面SS尺度と状況設定の適合度の問題であり、妥当性が否定されたものではないと解釈して以下の分析を進めた。

## 2. 自己解釈図式の場面変動の検討

独立性および相互依存性得点について内場面×外場面の散布図を描いたところ、独立性得点の分布は内場面>外場面(対角線左上)の者と外場面>内場面(同右下)の者がほぼ均等であるのに対し、相互依存性得点については内場面得点が高かった者(外場面得点より高い者が多かった)(Fig. 2)。この結果は、ウチの世界で相互依存的自己解釈図式が顕現する者が多いことを示すと同時に、独立性と相互依存性は別次元の属性であって共変しないことをも示している。さらに詳細に検討するため、各場面での相互依存性得点から独立性得点を引いた差得点について、0より大を相互依存群、0以下を独立群に分類して内場面×外場面のクロス表を作成した(Table. 4)。相対的には場面を通じて自己解釈図式が一貫している状況普遍型の方が多いが(70.6%)、場面によって顕現的な自己解釈図式が異なる状況随伴型も29.4%存在する。また、状況随伴型のうち理論上想定しにくい内独立-外相互依存型は4.5%と非常に少なく、大部分は日本人論に適合する内相互依存-外独立型である。以上の結果は、日本人学生のうち少なからぬ人々が状況によって自己解釈図式を変動させていることを示している。

Table. 4 内場面×外場面自己解釈図式の分布(%)

	外場面自己解釈図式		
	相互依存的	独立的	計
内場面自己解釈図式			
相互依存的	52.2	24.9	77.1
独立的	4.5	18.4	22.9
計	56.7	43.3	100.0(n=201)

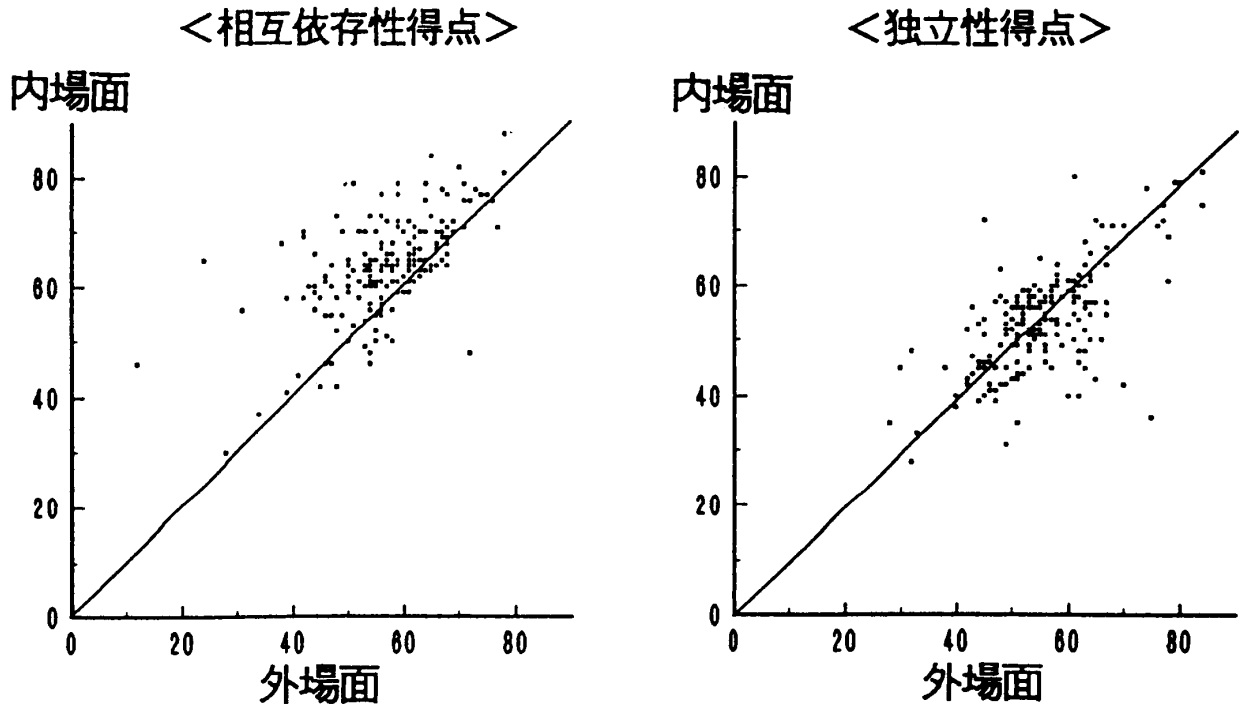


Fig. 2 自己解釈図式得点の内場面×外場面散布図

### 3. 状況普遍的自己解釈図式の分析

各場面について、被験者それぞれの相互依存性得点から独立性得点を引いた差得点を中央値折半し、内場面、外場面ともに独立的な群をII群、内場面で独立的、外場面で相互依存的な群をID群、内場面で相互依存的、外場面で独立的な群をDI群、内場面、外場面ともに相互依存的な群をDD群とした。仮説3を検討するため、行動1から行動4について各群の満足度の平均値を算出し (Table. 5)、各群ごとに行動の満足度を従属変数として条件間のt検定を行った。その結果、ID群およびDI群と同様に、II群でも行動1と行動4に有意差が認められた (行動1:  $t = -4.16$ ,  $p < .01$ ; 行動4:  $t = 3.27$ ,  $p < .01$ )。行動1については内葛藤条件<外葛藤条件、行動4については内葛藤条件>外葛藤条件であった。また、DD群では行動1で有意差がみられ ( $t = -4.17$ ,  $p < .01$ )、内葛藤条件<外葛藤条件であった。従って、仮説3は支持されなかった。

Table. 5 各自己解釈図式群における行動満足度の平均値

	I I 群 (n=75) <sup>b</sup>		I D 群 (n=34)		D I 群 (n=33)		D D 群 (n=70)	
	内葛藤	外葛藤 <sup>c</sup>	内葛藤	外葛藤	内葛藤	外葛藤	内葛藤	外葛藤
行動 1 <sup>a</sup>	2.07 (6.50) <sup>d</sup>	4.56 (6.15) <sup>e</sup>	3.56 (5.86)	5.29 (5.50)	3.53 (6.16)	6.53 (4.36)	1.18 (5.91)	4.11 (6.15)
行動 2	-6.67 (5.01)	-6.68 (5.17)	-7.35 (4.01)	-6.59 (4.61)	-6.72 (4.72)	-7.72 (3.38)	-7.54 (3.21)	-7.55 (3.54)
行動 3	-5.67 (5.00)	-6.43 (4.54)	-6.18 (4.86)	-6.68 (4.60)	-5.19 (5.37)	-7.34 (3.95)	-6.50 (4.26)	-6.88 (3.81)
行動 4	4.48 (4.81)	2.59 (5.55)	4.47 (4.60)	2.88 (5.22)	5.34 (4.48)	3.47 (5.11)	4.97 (4.29)	4.43 (3.52)

- a: 「行動 1」 = 「自分も恋人も映画に行く」に「実験に参加する」  
「行動 2」 = 「自分も恋人も映画を見、恋人は実験に参加する」  
「行動 3」 = 「自分も恋人も映画を見、参加する」  
「行動 4」 = 「自分も恋人も映画を見、参加する」  
b: II 群は内場面独立-外場面独立型である。以下、ID 群は内場面独立-外場面依存型、DI 群は内場面依存-外場面独立型、DD 群は内場面依存-外場面依存型である。  
c: 「内葛藤」は内集団条件、「外葛藤」は外集団条件である。  
d: () 内の数値は SD である。  
e: 下線部は、t 検定の結果、条件間に有意差があったことを示す。

#### 4. 行動採択の分析

群および条件別に各行動の採択度数を算出した (Table. 6)。なお、行動 2 と行動 3 は採択した人数が少なかったため合計してある。全体的に、内葛藤条件では行動 4、外葛藤条件では行動 1 を多く採択する傾向が認められる。各群ごとに行動 1 の採択/非採択×条件 (内葛藤/外葛藤) の  $\chi^2$  検定を行ったところ、すべての群に有意差が認められた。各群の  $\chi^2$  値は、II 群 [ $\chi^2=11.29$ ,  $p<.005$ ]、ID 群 [ $\chi^2=3.99$ ,  $p<.05$ ]、DI 群 [ $\chi^2=3.91$ ,  $p<.05$ ]、DD 群 [ $\chi^2=11.20$ ,  $p<.005$ ] となった。仮説 3 に従えば、II 群と DD 群は他の 2 群より条件による採択の差が小さいはずであるが、実際にはむしろ逆の傾向が認められる。従って、ここでも仮説 3 は支持されなかった。

Table. 6 群および条件別行動選択度数

	II 群 (n=75)	ID 群 (n=34)	DI 群 (n=33)	DD 群 (n=70)
<b>内集団葛藤条件</b>				
行動 1	25 (33.3)	17 (50.0)	14 (42.4)	19 (27.1)
行動 4	49 (65.3)	15 (44.1)	18 (54.5)	49 (70.0)
行動 2, 3	1 (1.3)	2 (5.9)	1 (5.9)	2 (2.9)
<b>外集団葛藤条件</b>				
行動 1	45 (60.8)	25 (73.5)	22 (66.7)	38 (55.1)
行動 4	28 (37.8)	7 (20.6)	10 (30.3)	29 (42.0)
行動 2, 3	1 (1.4)	2 (5.9)	1 (3.0)	2 (2.9)

注: () 内は各群における%

## 総合的考察

本研究では、状況によって顕現的な自己解釈図式が異なるという「状況随伴的自己解釈図式」の可能性を検討した。具体的には、内集団接触場面と外集団接触場面を区別して自己解釈図式を測定する尺度を作成し、その妥当性を検討した上で自己解釈図式の場面変動を吟味した。

研究2の結果は状況随伴的自己解釈図式の存在を示唆するものであった。この自己解釈図式が日本人に特有のものであるかどうかは欧米人対象者との比較を待たねばならないが、少なくとも日本人を対象とする自己解釈図式研究において今後考慮されるべき重要なポイントであろう。自己解釈図式の把握には、独立-相互依存という次元の他に、状況随伴-状況普遍というもう一つの視座が考えられるのである。状況普遍型と状況随伴型の行動上の違いは、仮説3が支持されなかったので明らかにできなかったが、今後検討すべき課題である。その際、自己解釈図式と他のパーソナリティ変数との関連性も吟味する必要があるだろう。

外場面SS尺度は外集団場面における行動満足度に有意な効果をもたらしたが、内場面SS尺度については内集団場面における効果が認められず、むしろ外集団場面での行動に影響する部分があった。従って、内場面SS尺度の妥当性には疑問が残るが、これは想定させた内集団場面の状況規範の強さによるものとも考えることも可能である。行動満足度と行動採択の両方において、自己解釈図式のタイプに関わらず内集団とのつながりを重視している傾向が認められたことから、土居(1971)の言う「義理の世界」では、自己解釈図式に反映される個人差は行動にきわめて表れにくいのであろう。同じ内集団でももっと遠慮の働きにくい「人情の世界」ではまた異なる結果が得られる可能性がある。つまり、自己解釈図式が反映される行動と反映されにくい行動の区分という視点も考慮しなければならない。

## 引用文献

- 井上忠司 1977 「世間体の構造」—社会心理史への試み 日本放送協会 69-103  
 ケリー H. H. 黒川正流・藤原武弘(訳) 1989 親密な二人についての社会心理学 ナカニシヤ出版  
 Kitayama, S Markus. R. H Kurokawa, M. & Kato, K 1991 Self-Other Similarity Judgement Depend on Culture. *Technical Report, University of Oregon*, No. 91-17: 1-21  
 松田大治 1994 独立的・相互依存的自己解釈概念尺度の妥当性の吟味 広島大学卒業論文  
 盛川浩次 1992 自己解釈概念の対人行動の質に及ぼす効果 広島大学卒業論文  
 高田利武 1992 独立的・相互依存的自己と自尊感情および社会的比較 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集 109-110  
 土居健郎 1971 「甘えの構造」 弘文堂 33-43  
 我妻洋 1982 集団主義の心理的要因 浜口恵俊・公文俊平(編) 日本人の集団主義—その真価を問う 有斐閣 69-72